

論 文 審 査 の 要 旨

博士の専攻分野の名称	博 士 （ 学 術 ）	氏名	上地 玲子																				
学位授与の要件	学位規則第4条第①・2項該当																						
<p style="text-align: center;">論 文 題 目</p> <p style="text-align: center;">ダウン症児の母親におけるリアリティショックに及ぼす影響過程の検討</p>																							
<p>論文審査担当者</p> <table style="width: 100%; border: none;"> <tr> <td style="width: 15%;">主 査</td> <td style="width: 15%;">教授</td> <td style="width: 15%;">岩 永 誠</td> <td style="width: 15%;"></td> <td style="width: 15%; text-align: right;">印</td> </tr> <tr> <td>審査委員</td> <td>教授</td> <td>坂 田 桐 子</td> <td></td> <td style="text-align: right;">印</td> </tr> <tr> <td>審査委員</td> <td>教授</td> <td>長 坂 格</td> <td></td> <td style="text-align: right;">印</td> </tr> <tr> <td>審査委員</td> <td></td> <td></td> <td></td> <td style="text-align: right;">印</td> </tr> </table>				主 査	教授	岩 永 誠		印	審査委員	教授	坂 田 桐 子		印	審査委員	教授	長 坂 格		印	審査委員				印
主 査	教授	岩 永 誠		印																			
審査委員	教授	坂 田 桐 子		印																			
審査委員	教授	長 坂 格		印																			
審査委員				印																			
<p>〔論文審査の要旨〕</p> <p>子育てにはさまざまなストレスが伴う。とりわけ子どもに障がいがある場合には多くのストレスを抱えることになる。生まれてきた子どもに障がいがあるとわかった母親は、出産前に抱いていた子育てイメージと直面した現実との間に大きなギャップを感じる。このギャップはリアリティショックと呼ばれる。本論文は、知的障がいの中で最も多いダウン症を子どもに持つ母親が経験するリアリティショックを明らかにし、それを規定する要因との関係性を検討することを目的としている。以下の7章から構成されている。</p> <p>第1章では、障がい児の分類と福祉の変遷について概説したのち、ダウン症児を抱える母親を検討の対象とする根拠およびリアリティショックの観点から検討する必要性について述べている。また、ダウン症児の母親が抱えやすい育児ストレス要因について概説し、リアリティショックや喚起されるストレスや満足感との関連についての仮説を立てている。</p> <p>第2章（研究1）では、ダウン症児の母親が経験するリアリティショックを測定する尺度の項目を抽出するため、ダウン症児の母親10名に対してインタビューを行い、その内容を元に9カテゴリー53項目を抽出している。</p> <p>第3章（研究2）では、研究1で抽出された53項目を用いて、ダウン症児の母親が経験するリアリティショック尺度（RSMD）の因子（ネガティブな側面4因子とポジティブな側面2因子）を確定し、信頼性と妥当性を有していることを確認している。</p> <p>第4章（研究3）では、母親のリアリティショックを引き起こすと考えられる要因（子どもの問題、母親の問題、家族の問題、環境の問題）の下位因子を確定し、家族の問題のみ2因子で、その他の問題は3因子から構成されることを明らかにした。また、生じる反応は不安抑うつとストレス、満足感情から構成されることを明らかにした。</p> <p>第5章（研究4）では、リアリティショックを規定要因とリアリティショック、反応との関連性を検討している。その結果、それぞれの問題の下位因子によって影響するリアリティショックの下位因子が異なること、リアリティショックのネガティブな側面だけでなく、ポジティブな側面にも影響し、出産に対するショックや困惑感を抑制させ、家族の理解を実感させ、母</p>																							

親を前向きな気持ちにさせることを明らかにしている。

第6章（研究5）では、ダウン症児の年齢を3つに区分（0-4歳，5-8歳，9-12歳）し，リアリティショックの推移や影響過程の違いを検討している。リアリティショックの程度にはほとんど年齢層による違いは認められなかったが，影響過程には違いが認められることを明らかにしている。

第7章では，リアリティショックが多様な要因から影響を受けていること，子どもの年齢によって主要な規定因が異なることについて，総合的に考察を行っている。さらに，リアリティショックに悩む母親に対するサポートのあり方や社会への提言を行っている。

本研究において，ダウン症児の母親が抱えるリアリティショックの内容を明らかにした点，およびリアリティショックの影響過程を明らかにした点は高く評価できる。これまでダウン症児の母親についてのリアリティショックに関する研究は行われていないことから，本論文の知見は極めて貴重である。本論文の知見を元に，ダウン症児の母親に対するサポートの方向性を示すことができるため，社会的応用性の高い研究といえる。

以上のことから，本論文の独創性は極めて高く，学術的および社会的価値は大きいと判断した。

以上，審査の結果，本論文の著者は博士（学術）の学位を授与される十分な資格があるものと認められる。